

ラファエル・フォン・ケーベルとカール・デュ・プレル ——明治期日本に伝わったドイツの心靈主義について——¹

熊谷 哲哉

はじめに

本論考では、明治末期から大正期にかけての日本で、哲学者・ドイツ語教師・音楽家として活躍したラファエル・フォン・ケーベル（1848～1923）の思想的影響関係について検討する。1880年代なかばから、1893年の来日までのミュンヘン在住時に、ケーベルは哲学者エドゥアルト・フォン・ハルトマンに私淑するとともに、カール・デュ・プレル（1839～1899）に代表される心靈主義サークルと交流を持ち、心靈主義の雑誌に多くの論稿を寄せていた。世紀転換期ミュンヘンで流行した心靈主義の思想が、ケーベルの哲学とともに、どのように日本へと伝えられ、そして近代日本の思想にどのような影響を与えたのかという問題について、一つの事例として、宗教学者姉崎正治（1873～1949）との関係から論じる。

1. 「ケーベル先生」ことラファエル・フォン・ケーベルの生涯

明治末期の1893年に来日し、帝国大学で哲学およびドイツ語、ギリシア語などを講じ、ピアノ教師としても活躍したケーベルは、「ケーベル先生」として、教え子であった夏目漱石や西田幾太郎などから、その人柄や学識を敬愛されてきた。1923年にケーベルが亡くなった際には、岩波書店の雑誌『思想』は、8月号をケーベル追悼の特別号として刊行した。この特集号には、かつてケーベルの書生であり最も愛された弟子だったといわれる久保勉（岩波文庫『ケーベル先生隨筆集』の編者）や深田康算をはじめ、波多野精一、西田幾太郎、桑木巖翼、安倍能成、和辻哲郎、姉崎正治らケーベルの薰陶をうけた哲学者、宗教学者たちが、追憶を寄せている。

ケーベル先生といふ様な人は、逝かれてから、その学問上の功績について称へるよりも、寧ろ水の竹邊より流れ出るものは冷に、風の花裡を過ぎ来るもの

は香しと云った様に、その教養深き高雅なる人格が自ずから周囲を薫した所に、先生の匹なき尊さを思ひ出すべきであらう。²

このように述べる西田に代表されるように、ケーベルは「教養」と「人格」をもつて知られ、学生たちから愛されていた。波多野もまた、ケーベルにおける芸術的素養と深く結びついた人格こそ「すべての専門すべての一技一能を超えて先生に於て尊かつたもの」であると述べた³。ドイツ語のみならず、ギリシア語を講じ、ギリシア哲学の価値を尊重しながら、現代ドイツの哲学を解説するケーベルは、彼らにとって、まさに教養主義を体現する人物だったといえよう。

一方で、ケーベルがどのような半生をへて、日本へやってきたのか、そしてケーベルがどのように音楽や哲学の素養を身につけていったのか、さらに日本でどのような哲学を講義したのかという点については、弟子たちの中では久保勉の伝記以外に、ほとんど言及されていない。久保が、ケーベルの生涯をもっとも近くに寄り添った人物として描いたのが、伝記集『ケーベル先生とともに』である⁴。『思想』のケーベル追悼号では、ごく簡単な人物紹介しか書かなかつた久保は、さらに年月を経た1951年に、25周忌をすぎてようやく、これまでに書いたケーベルについての文章をまとめた。以下、久保の伝記をもとに、ケーベルの経歴を簡単にまとめたい。

ラファエル・フォン・ケーベルは、1848年にロシアのニジニ・ノヴゴロドで、ドイツ系の父とロシア系の母のもとに生まれ、音楽の道を志し、モスクワ音楽院で学んだが、内気な性格のため演奏家となることを断念した。その後ドイツに渡りイエーナ大学でエルンスト・ヘッケルのもとで生物学を、ルドルフ・オイケンに哲学を学んだ。途中でハイデルベルク大学に移り、クーノー・フィッシャーから哲学を学んでいる。そして1881年にショーペンハウアーの哲学についての論文で、博士号を授与された。このころシュヴェーグラーの『西洋哲学史』の増補改訂版を発刊するにあたり、ケーベルが執筆者となっている⁵。増補にあたり、ケーベルの担当は明記されていないが、彼がよく知るショーペンハウアーとエドゥアルト・フォン・ハルトマンの章を付け加えたのだろう⁶。ハルトマンが1869年に発表した『無意識の哲学』(*Philosophie des Unbewussten*)はショーペンハウアー哲学を受け継ぐものとして多大な影響力を持っており、ケーベルのみならず、多くの同時代人が、ハルトマンの哲学に熱中した。この『西洋哲学史』および84年に発表した『ハルトマンの哲学体系』(*Das philosophische System Eduard von Hartmann's*)によりケーベルはハルトマン本人と知己を得て、その著作を高く評価された。1885年以後は、幼なじみの

ダヴィドフ博士（生物学者）がいた場所である、ミュンヘンに定住した⁷。1892年にハルトマンからの手紙で、帝国大学の哲学教師として推举できる人を紹介してほしいとの依頼に応え、1893年に日本へ渡航することになった⁸。東京では、帝国大学でドイツ語や哲学を教えるだけでなく、ピアノの講師（ときに演奏会も行った）として出講するなど、教育活動に尽力した。ケーベルは当初3年の予定で日本に滞在していたが、その後幾度も契約を更新し、日本での生活を続けた。1914年には、大学との契約が切れて帰国することになったが、ちょうど第一次世界大戦の開戦にぶつかったため帰国できず、乗船前に滞在した横浜のロシア総領事官邸の一室に、そのまま9年間滞在したという⁹。晩年には、世間を離れ読書や文筆活動に集中し、「蝸牛生活」（久保）を営み、『ケーベル博士小品集』などの著作を残し、1923年6月14日に狭心症のために亡くなった。

帝国大学着任以後の日本におけるケーベルの活躍や、影響については、関根（1999）、瀧井（2018）や長濱（2020）などに言及されており、ドイツ語や哲学のみならず、音楽教育においても重要な功績があったことは、現代の日本においても注目され、研究が進んでいる¹⁰。

一方で、1848年生まれのケーベルが、東京に来る1893年まで、とりわけ博士号取得からドイツを離れるまでの10年あまりの時期に、どのような人々と交わり、研究者としてどんな活動をしてきたのかは、あまり知られていない。日本哲学史を参照しても、哲学者ケーベルについての記述はごくわずかしかない¹¹。ケーベルの哲学講義については、実際に帝国大学文科大学において哲学入門として行われた講義録『哲学要領』（下田次郎訳）が残されている¹²。この講義録では、「1 哲学の総念、2 哲学の分類、3 哲学の方法、4 哲学の系統」という大きなテーマに基づき、それぞれに古代ギリシアからショーベンハウアー、ハルトマンら19世紀末の哲学までが紹介されている。ケーベルの教えを受けていた桑木巖翼は、「ケーベル先生の神秘主義と形而上学とは私に取つては永久に開かれない宮殿である」と述べている¹³。「神秘主義」や「神秘的」という表現は、桑木だけにとどまらず、何人の弟子たちが使うキーワードである。ケーベルにおける神秘主義とは、単に哲学史的な、神秘主義への関心だけに止まらない。ケーベルのドイツ滞在時における活動、とりわけ心靈主義サークルでの執筆活動について、次章で検討する。

2. ケーベルとカール・デュ・プレル

岩波文庫に収められ、現代に至るまで復刊を続けケーベルの著作として唯一知ら

れている『ケーベル博士隨筆集』は、岩波書店から出された『ケーベル博士小品集』、『ケーベル博士続小品集』、『ケーベル博士続々小品集』(ドイツ語版も同じく3巻本で、岩波書店から刊行された)を久保が編集、翻訳したものである。『隨筆集』では、「私の友人カール・デュ・プレルは、常に日本を「福者住む島」と呼んでいた」と、ミュンヘン在住時の友人として、デュ・プレルの名前を挙げている¹⁵。また、『続小品集』では、靈魂の不滅への信仰を語っている節において、ふたたびデュ・プレルの名前を挙げ、そのオカルティズムの哲学を紹介している¹⁶。『隨筆集』の解説で、久保がごくわずかに指摘しているが、ミュンヘンでのケーベルは、「小説家のパウル・ハイゼや、哲学者のデュプレル〔原文のまま〕博士や、心理学者のマックス・オフナー博士や、心靈学者(オックルティスト)のダインハルトや、シュレンク・ノッチングのような人々」と交流していたという¹⁷。では、ここで名前を挙げられているカール・デュ・プレルとはどのような人物だったのだろうか。以下に、簡単に経歴と主著をまとめておく。

1839年、バイエルンの古都ランツフートで、ユグノーの家系に生まれたデュ・プレルは、ミュンヘンで育ち、テュービンゲン大学ではじめは法学、のちに哲学を学んだ¹⁸。途中バイエルン軍人として戦争に通訳として従軍し、1868年に『夢解釈——超越論的觀念論の立場から見た夢』¹⁹によって博士号を取得、1870年代には軍隊を退役し、在野の思想家として執筆活動を始めた。デュ・プレルは、ショーペンハウアーの哲学、そしてこの当時流行の最先端であった、エドゥアルト・フォン・ハルトマン(1842~1906)の哲学に心酔し、年齢の近いハルトマンとは、多年にわたって書簡のやり取りをしており、親友でなかば師のように慕っていた²⁰。

哲学的に無意識を理解することに関心を抱いたデュ・プレルは、その後ヘッケルによって普及した、進化論的生物学に関心を抱き、地上における人間の進化に関連づけて、宇宙の進化を論じた『宇宙における生存競争』(1874年刊、のちに『宇宙の発達史』と改題)を発表した。1880年には、夢や無意識の研究を詩人における創作と関連づけた、『叙情詩の心理学』を著している²¹。1877年に天文学者カール・フリードリヒ・ツェルナーの行った靈媒実験や、オーストリアの思想家ヘレンバッハからの影響で、このころから心靈主義に関心を抱き、神智學協会にも参加している²²。1885年には代表作となる『神秘哲学』を著し、1886年からは植民地政策評論家でオカルティストでもあったヴィルヘルム・ヒュッペ=シュライデンとともに、心理学協会(Psychologische Gesellschaft)を結成し、またヒュッペ=シュライデンが編集する雑誌『スフィンクス』²³が刊行を開始し、デュ・プレルはその中心的な寄稿者となった。

1880年代後半以降デュ・プレルは、『スフィンクス』を中心にさまざまな媒体に寄稿した論文をつぎつぎと著作にまとめていった。『一元論的魂理論』(1888)、『秘術の領域からの諸研究』(1890, 1891)、さらに小説『氷河の十字架』(1891)や、レクラム文庫に収録され、青年期のリルケにも強い影響を与えた²¹『人間の謎』(1892)や『心靈主義』(1893)によって、広く知られる存在となっていました。デュ・プレルの心理学協会には、ミュンヘンの心靈主義サークルとともに代表する書き手であった催眠研究者アルベルト・フォン・シュレンク=ノッツィング、工学者のルートヴィヒ・ダインハルト、画家のガブリエル・フォン・マックスやアルベルト・ケラーをはじめ、30名以上のさまざまな分野の知識人、芸術家、貴族らが集っていた。1887年の時点で、正規会員の一人としてラファエル・フォン・ケーベルも名を連ねている²²。

のちにデュ・プレルとシュレンク=ノッツィングは、心靈研究における科学性への態度の違いから離別し、デュ・プレルは1889年に「実験心理学協会」のうちに「学術的心理学協会」(Gesellschaft für wissenschaftliche Psychologie)を設立した。新団体のメンバーは不明だが、デュ・プレルの信奉者たちの多くは彼に従ったというから、ケーベルも行動をともにしたと考えられる。デュ・プレルは、90年代なかば以降は、ほとんど『スフィンクス』誌には投稿しなくなっていた。そして遺作『死、彼岸、彼岸における生』と『自然科学としての魔術』(2巻本)を発表し、1899年の8月に亡くなった。

ケーベルとデュ・プレルの親密な関係については、残念ながら両者の書簡が残っていないことから確たる証拠を挙げることは難しい。しかしながら、なかばデュ・プレルとその仲間たちによる広報誌となっていた『スフィンクス』に、ケーベルは1888年、第5巻に掲載された「ショーペンハウアーの神秘主義」を皮切りに、1892年第14号まで、ほぼ4年間にわたってほとんど毎月のように、数多くの論考を寄せていた。代表的なものとしては、「デュ・プレルの一元論的魂理論」(1888年)、「カントはスウェーデンボルク主義者か?」(1889年)、「新たな神秘」(1890年)、「レオ・トルストイとその無教会的キリスト信仰」(1890年)、「個人主義の一元論のシステム」(1891年)、「オカルティズムの魂理論」(1892年)、「ゲーテの不死性についての見解」(1892年)などが挙げられる²³。

1888年の「デュ・プレルの一元論的魂理論」は、同年に発表されたデュ・プレルの著作についての解説的な論考である。この本では、人間の魂の本来的な姿であるアストラル体、そしてその地上における出現形態であるドッペルゲンガーや夢遊状態(Somnambulism)についての研究から、肉体と精神、生と死という二元論を超

た、「一元論的」な魂についての見解が提示されている。この論考で、ケーベルはデュ・プレルを称賛しながら、この著作の解説を試みている。

ケーベルとデュ・プレルは、ヘッケルの生物学、シェリングやショーペンハウアー、そしてハルトマンの哲学と、ほぼ同じような同時代の知識を吸収し、哲学的に心靈現象を探求してきたが、両者の方法論は似ていない。デュ・プレルの手法が、心靈現象についての実験や観察記録だけでなく、伝説や物語なども含めた事例の収集から論を組み立てているのに対し、ケーベルはあくまで学者として、具体的な哲学文献を論拠として論述している。『スフィンクス』掲載論文を見ると、カント、ショーペンハウアー、ハルトマン、フランスのラマリオンやアンコースなど、著名な哲学者や心靈主義者の著作を出発点に、哲学的な方法によって、オカルティズムの世界像を擁護するという方法をとっている。しかし、両者の見解はやはり似通っている。ケーベルにおいて、デュ・プレルとの親和性がもつとも強く現れているのが、論文「ショーペンハウアーの神秘主義」である。この論文は、1918年(邦訳は翌年)に刊行された『ケーベル博士小品集』(Kleine Schriften)の巻末に、付録としてそのまま収録されている²⁵。横浜での晩年に編まれたこの本に、30年以上前に書いたショーペンハウアー論を収録しているということから、この論文への思い入れの強さを推し量ることもできよう。

この論文の中で、ケーベルはショーペンハウナーの『視霊とこれに関連するものについての研究』²⁶を取り上げている。ショーペンハウナーの論考では、當時流行していた動物磁気による夢遊現象や視霊現象について、その原因を人間における魔術的な力に求め、それこそが死後においても存続する意思の現れであると結論づけている。この論をケーベルはさらに、さまざまな心靈現象についても応用し、検討を加えていく。最終的にケーベルは、死後における意思の存続を擁護しない限りは、幽霊現象ほか、心靈現象が起こる原因を見出すことは不可能であると述べる。

それゆえ生理学的な方法をとって、幽霊現象の客觀的な遠隔的原因を発見するということは不可能である。そうなるとこの事柄の形而上学的な説明だけが残る。それは以下のようになる。死者の、不滅な意思是熱烈に地上の出来事に向かられ、地上へと作用をおよぼすためのあらゆる手段がない中で、いまやその隠れ場所を、地上に生きていたときにも、死後においても同様に与えられていた、魔術的な力へと求めたのだ。[…]

すなわち生きている人間による魔術的な影響もまた、いつさいの有機的また無機的な事物に存する同一の内的本質によってのみ生じるのであれば、われわ

れはショーペンハウアーとともに——もちろん不条理に陥る危険はあるが——死者の意思行為はまた生命を持たない身体をも動かすことができるということも容認できるだろう。このことは、あらゆる幽霊現象およびその他のいわゆる「物理的顯現」の完全な説明を提供することになるだろう。²⁹（強調は原著者）

さらに、ケーベルがドイツを発つ前年に発表した小さな本『生命の問題』(*Die Lebensfrage*)では、ショーペンハウナー、ハルトマンの哲学を援用しつつ、生きている状態とはどういうことかという問題が論じられる。本書の後半では、テレパシーや心霊現象が取り上げられ、最終的には、超感覚的な世界、現実の原則では計り知れない世界の存在が確認されている。ケーベルは結末でこのように述べている。

私たちは超感覚的な世界について、その存在のみを知っているに過ぎないが、私たちは、現実性の認識原理をこの世だけでなく「あの世」についても見出したのだということで十分である。「生命の問題」は解決された。いまや私たちには、他の道はない。真実へ、実際的な卓越性へ、現世における安息と安心の実現へと至る道は、静かな、真剣な、靈魂の世界(Geisterreich)を通り抜けていくあの道以外にはないのだ。³⁰

まさに「心霊主義のすすめ」のような堂々たる宣言文である。このような現世において解明されない諸問題を、超感覚的な世界、彼岸の世界において發揮される能力によって解決しようとする考え方とは、ほぼ同時期に書かれたデュ・プレルの著作『人間の謎』と一致している。

よりいっそう我々がこの領域[心霊主義のこと]を研究すれば、それだけ明確に、死が個(Individualität)の消滅を意味するのでも、世界主体への解消を意味するのでもないと、我々は知るようになる。そして我々は、より高まつた個性を伴って生き続け、それゆえ死者はより生き生きとしているのだということを知る。将来的な存在についての超越論的な現実性と比較して、ジョルダーノ・ブルーノ——そのために彼は秘教学を知っていたのだろう——が述べているが、「地上の生は、個の縮小としての生であるという。私たちが死と称するものは、新たな生への誕生であり、しばしば現在の死は将来の生とは反対に名付けられていることになるだろう」。³¹

ほかにもケーベルがデュ・プレルの心靈主義を受容し、自らの思考に取り込んでいた証拠を挙げることができる。『ケーベル博士続小品集』は、「私の世界」、「私の日毎の祈り」、とケーベルの宗教生活と宗教的世界觀を綴ったエッセイから始まっている。ケーベルは死後における人格の存続とより一層の発展について、疑いを抱いたことがないと述べたのちに、オカルティズム的な宗教ならびに人間觀について言及している。ケーベルがいうには、自らも当たり前のこととして受け入れてきた、キリスト教の教義には、信仰のない人には、理解し難い点がいくつもあり、それを補完するのが、「アストラル体」のような神智学的、オカルト的な概念であり、その分野について知ることで、さまざまな「驚異」(Wunderbares) も「ほとんど自然的な方法」によって、説明可能となるし、それによってキリスト教の不可解な面についても確信させることが可能だろうという。そして無神論者でありながら、キリスト教的奇蹟をオカルティズムの科学によって解明しようと試みた人物としてデュ・プレルが挙げられる。

カール・デュ・プレルは実際のところ無神論者であった。少なくとも彼は人格神の觀念を彼の世界觀のうちに認めなかつた。しかしデュ・プレルは、確信ある心靈主義者であり、あらゆる他の「オカルティズム」の教説をも疑いなき事実と認めていた。そうして彼は多年にわたつて——私が彼と知り合つてからずっと——オカルティズムの觀点からキリストの生涯について書こうという計画を抱いていた。催眠——それはオカルティズムの玄関口ともいふ——の助けを借りて、彼はイエスの様々な奇蹟を解明しようとしたが、それは私から見れば、まさしく可能なことのように思える。[...] デュ・プレルはこの本を書くことはなかつたが、それを私は残念なこと思つてゐる。なぜなら疑いもなく刺激的で、深遠で、また理性ある、啓蒙された信者にとっては歓迎すべきものとなつただろうからだ。³² (強調は原著者)

デュ・プレルがキリスト伝を書こうとしていたというのは、他の資料には見られない見解であり大変興味深い。ケーベルは続けて「オカルティズムは自然科学の一分野として、そしてその心理学は実験心理学と見做されるはずである」と述べ、デュ・プレルがレクラム文庫の『心靈主義』収録論文、「いかにして心靈主義者となつたか」³³で述べたように、未來の科学としての「オカルティズム」に期待をかけていたことが分かる。たしかにケーベル自身は、デュ・プレルや他のメンバーたちのように、積極的に心靈主義の解明に取り組んではいなかつた。その姿勢は、むし

るケーベル自身が拠って立つ、汎神論的思想の一形態として的心靈主義的世界觀に共鳴していたということができよう。

3. ケーベルと姉崎正治

ケーベルが、デュ・プレルおよびミュンヘンのサークルから受容した心靈主義の思想は、帝国大学におけるその後の教育において、どのように日本の思想へと影響を及ぼしたのだろうか。

ケーベルの思想的影響は、和辻や波多野、深田などにおいてもみられるというが、日本における宗教哲学の開祖といわれる姉崎正治もまた、ケーベルの神秘主義的な傾向に引き寄せられた人物と言われている³⁴。ここでは、ケーベルの日本思想への影響の一例として、初期の姉崎の著作を検討する。

姉崎は、1873年に京都に生まれ、1893年に帝国大学に入学して、ケーベルの哲学講義を受けた。つまり、ケーベルの教え子としてまさに第一世代にあたる。ケーベルは英語で講義を行い、姉崎はそれをドイツ語で筆写し、添削を受けたのちに、ドイツ語で論文を執筆してケーベルに提出した。姉崎には、もちろん日本人の指導教員がいたが、もっとも多く授業を受けたのは、ケーベルだったとの間に述懐している³⁵。姉崎の哲学は、シェリング、ショーベンハウアー、エドゥアルト・フォン・ハルトマンなどから多大な影響を受けている³⁶。しかし若い時期には、かなりの熱意で、心靈主義にも関心を抱いていた³⁷。

姉崎は1900年から3年間、ヨーロッパに滞在し、キール、ライプツィヒ、ベルリン、ロンドンで留学生活を送った。そのさい、ベルリンではエドゥアルト・フォン・ハルトマンを訪問し、スピリチュアリズムに傾倒しすぎないよう注意を受けたことを³⁸、またロンドンでは、神智学者として当時有名であったアニー・ベサントの講演を聞いて大いに刺激されたことを、親友高山樗牛への書簡で伝えている³⁹。

モローが指摘するように、姉崎はイギリス滞在時に心靈主義研究に傾倒し、心靈現象研究協会 (Society for Psychological Research略称：SPR) のメンバーにもなっていた⁴⁰。帰国後に、姉崎は神秘主義についての講義を行なっている。この講義では、神秘主義から心靈主義まで、幅広い問題が取り上げられていたという⁴¹。本人の講義ノートや、この講義に関連する論文は残っていないが、講義に参加していた学生の証言は残っている。小説家の武林無想庵は、姉崎の授業を振り返ってこう述べている。

新帰朝、姉崎先生の神秘主義講義をきくにおよんで、さながら魚の水を得たるごとく、Metaethereal Medium (超エーテル媒介) による Psychical research の実例や、識域をこえて、無意識界に通ずるという Secondary Self (第二のわれ) の実存説に魅せられ、爾來なにものかに憑れたる狂信者のように、昼は教室より図書館より、人なき御殿の池の縁にひねもす立ちづけ、夜は書斎をでて、英國大使館前の桜林を背にして、幽邃な石垣の松を対岸にした、千鳥ヶ淵の草土手に腰を下ろし、夜もすがら、冥想に耽ったりしたあげくのはて、学校を休んで、「神秘」の創作に没頭することになりました。¹²

おそらくこれは極端な例だろうが、学生たちからは非常に興味深いものとして受け止められたと考えられる。

また、1904年に発表した著作『復活の曙光』において、姉崎はイギリスで彼自身が見聞した、心霊研究を取り上げている。その研究成果が、通常の人間精神には現れないものの存在を明らかにしたと述べ、さらに心霊研究を「われわれの個人が、この世ならぬ大きなものとの精神的な交流によって成立している」という自らの説を補強する根拠としている¹³。この本には付録として、さまざまな媒体に書いた記事や翻訳、小論などが収録されているが、「精霊教万国同盟結合の檄」という文書の翻訳と解説がある¹⁴。この精霊教とは、万人が同一の精霊から分化してきた個人であるという教えを信奉する、ある種のキリスト教エソテリズムであり、姉崎はケーベルからこの団体について教えられ、興味を持ったため、翻訳したと述べている。精霊教とは、ミュンヘンの心理学協会やロンドンの心理研究会と問題を共有している団体と姉崎はいうが、どのような団体なのか、ケーベルがどのように関与していたかは不明である。しかし、姉崎とケーベルがスピリチュアリズムという共通の関心で結びついている証拠の一つとして挙げることができる。

姉崎にとって、心霊主義研究は、その後の研究の中心とはならなかったが、後年に至るまで、継続的に関心を持っていた。1918年に発表した『新時代の宗教』では、姉崎は、早くに亡くなった友人の思想家高山樗牛を想起しながら、死後の魂の不滅について述べている。

即ち人格は、心霊大流動の一中心として、心霊の力を自覚で代表し、自覚の内容たる理想に向かつて向上する価値設定の一単位である。[...] 靈魂といふ出来上がった、又固定した一実体が不動に存在するのではなく、人格活動の中心が身心の変化生滅を超えて生存永続するのである。即ち固定の靈魂を否定し

て、その代わりに、流動の心靈が人格として発達する、之を心靈の不滅と称する。この不滅は、身体を享けて居る間にも発達し、又身体以外にも活動する。[…]此の如き所謂る「心靈現象」については、近年書物も多く出て居るが、其の中で白眉と称すべきは、マイヤースの『人間の人格』である。¹⁵（強調は原著者）

人間の個々の靈魂は、大靈（大いなる靈）との交流を続け、肉体が死しても、生存し、成長を続けるというのだ。この靈魂の不滅および死後の発展の説を、姉崎は、倫理学者シジウィックらとともに1882年にSPRを設立した、英文学者でオカルティストのフレデリック・マイヤースの書『人間の人格と死後の生存』(*Human Personality and its Survival of Bodily Death*)を援用して語っている。この箇所には、ケーベルやデュ・プレルらと共に通する、まさに心靈主義の中心ともいべき、個人としての人格の不滅と、死後の発展というテーマが述べられている。

初期の姉崎における心靈主義、神智学、神秘主義への傾倒は、深澤が指摘するように、ヨーロッパ留学で体験した西洋文化への批判として、のちの宗教学研究へとつながっていく¹⁶。姉崎は、ケーベルから教えられた、シェリングやショーペンハウアーのような、非理性主義的思想や、文学的ロマン主義への関心を基盤に、物質的・唯物論的な科学文明を批判した。その上で、一人一人の人間が、どのように個人としての生を充実させ、個の集合としての国家を作っていくべきか、という具合に、個を結びつける思想として宗教が重視され、さらに国家論へとその思想を発展させていった。姉崎は、1905年に、東京大学宗教学研究室の初代教授となり、日本における宗教哲学の創設者として活躍した。

ケーベルの教えを受けた和辻、波多野、西田、九鬼らの哲学者たちは、姉崎のように心靈主義に傾倒することはなかった¹⁷。しかし、『思想』の追悼号に彼らが文章を寄せたように、やはりケーベルが説いた、驚くべきもの、不可思議なものへの関心や神秘的なものへの関心、そしてキリスト教の教義に固執しない宗教観は、日本哲学の生成期において、一つの出発点となっていたと考えられよう。

おわりに

本論考ではおもに伝記的な側面に着目して、ケーベル、デュ・プレル、姉崎の影響関係を論じた。それぞれの著作には、紙幅の都合上あまり深く立ち入ることはできなかつたが、ハルトマンとデュ・プレルそしてケーベルへの影響、またケーベル、デュ・プレル、姉崎におけるショーペンハウバーとの関係の相違といった問題

については、改めて論じてみたい。

ケーベルのミュンヘン時代については、これまでほんと研究がなく、来日後のケーベルについての研究も、『小品集』ほか日本で発表された雑誌論文や、音楽教育、作曲活動など、東京・横浜時代の著作に集中していた。また、ドイツでのケーベルの足跡についても、国立図書館等には、初期の哲学研究書が所蔵されているものの、書簡など個人的な関係を窺わせるものはほとんど残っていなかった。

しかしデータベース化された、ドイツの雑誌を紐解くと、ケーベルと心靈主義者デュ・プレルの結びつきのように、意外な人間関係が見えてくる。一方ケーベルがミュンヘン時代に親しんだ心靈主義が、どのように彼の哲学に取り入れられ、そして日本での弟子たちに受容されたのかという点については、わずかに、姉崎正治における神秘主義的傾向というかたちで、つながりを見いだすことができたものの、まだまだ推測の域を出ないし、もっと他にも証拠となるような資料が見出せるだろうと期待している。また、姉崎正治におけるスピリチュアリズムからの影響のどこまでが、ケーベル由来であり、どの部分がプラヴァツキーやベサントなどイギリスのスピリチュアリズムから来ているのかという点についても、より詳細に検討する必要がある。

本稿では、以上のように、明治期日本で活躍した、「みんなに敬愛された人格者ケーベル先生」という一面的な像だけが残り、それ以外はほとんど忘れ去られてしまったラファエル・フォン・ケーベルという人物について、ドイツ側から資料を収集し、再構成を行うことを試みた。ドイツにおいて一つの時代精神を形成していたともいえる、靈魂の不滅と死後の発展を信じる、デュ・プレルらのオカルティズムの思想が、単に一過性の流行として消費されるだけでなく、ケーベルを通じて、日本の思想にも受け継がれていたという、オカルティズム受容の一つの経路を示すことができた。

注

- 1 本論稿は、口頭発表 "The Influence of German Spiritualism on Modern Japanese Philosophy: Raphael von Koeber at Tokyo Imperial University" (Science and Spiritualism, 1750-1930, Leeds Trinity University, 2019年5月29日) の発表原稿を加筆修正したものである。
- 2 西田幾多郎「ケーベル先生の追憶」岩波書店『思想』8月号 1923年 32ページ。
- 3 波多野精一「ケーベル先生追憶」岩波書店『波多野精一全集 第3巻』所収 1949年 299

ページ。

- 4 久保勉『ケーベル先生とともに』岩波書店 1951年。
- 5 Schwegler, Albert/ Koeber, Raphael von: *Geschichte der Philosophie im Umriß. Ein Leitfaden zur Übersicht.* Vierzehnte Auflage. Stuttgart: Carl Conradi, 1887.
- 6 関根和江「ケーベル先生文献（その一）」『東京藝術大学音楽学部紀要』第23巻 49～56ページ 1999年 3ページ。関根はシュヴェーグラーの『西洋哲学史』1883年刊行、第12版をとりあげ、ショーペンハウバーの節をケーベルが書いたと述べているが、1887年の版では、ショーペンハウバーに統いてハルトマンの節も設けられていることから、この2節をケーベルが書いたと考えられる。
- 7 久保は詳しく述べていないが、ケーベルの著書 *Schopenhauers Erlösungslehre* の冒頭には「親愛なる Michael von Dawidoff に、変わらぬ友情を込めてこの本を捧げる」という献辞が掲げられていることから、この人物がダヴィドフ博士であろうと想像できる。ミヒヤエル・フォン・ダヴィドフは形態学者として活躍した。
- 8 もともと帝国大学で哲学を教えていた新カント派の哲学者ブッセが、1892年に帰国したため、井上哲次郎が後任探しにあたった。井上は、ハルトマン本人を招聘したいと望んだが、ハルトマンは青年時代に軍隊での負傷が元で、移動が不自由だったためこれを断り、代わりにケーベルを推薦した。
- 9 1914年の帰国に際して、夏目漱石は朝日新聞に「ケーベル先生の告別」と題した文章を寄稿し、この日横浜を発つというケーベルと東京で最後に会ったときの思い出を綴っている。夏目漱石『ケーベル先生の告別』『朝日新聞』1914年8月12日朝刊 6ページ。
- 10 1918年10月12日の朝日新聞には、ケーベルのロシア総領事公館での生活が取り上げられている。「ケーベル老博士 曾て東大哲学科の権威露國領事館の一室に住む」『朝日新聞』1918年10月12日朝刊 5ページ。この記事の他にも、ケーベルはしばしば新聞記事に取り上げられている。演奏会、講演会、そして晩年の消息や訃報、追悼記事はもちろんのこと、1905年7月には、ケーベルが、雇っていた車夫に大学の俸給を盗まれたという事件まで掲載されている。「ケーベル氏の災厄」『朝日新聞』1905年7月14日朝刊 6ページ。のことから、ケーベルが、漱石の文章や、自らの著作で知られる以前から、名士として広く敬愛されていたことが推測できる。
- 11 関根（1999）、瀧井敬子『夏目漱石とクラシック』毎日新聞出版 2018年、および長濱一眞『近代のはずみ、ひずみ——深田康算と中井正一——』航思社 2020年を参照。
- 12 藤田は、ケーベルを紹介し、波多野、田辺、西田など後年の日本哲学界を代表する人物たちに影響を与えたと述べているが、「その業績よりも、むしろ弟子たちへの學問的人格的影響によって、大きな足跡を残した」というように、ケーベル自身の哲学的関心とその影響についてはとくに言及していない。藤田正勝『日本哲学史』昭和堂 2018年 132ページ。
- 13 ラファエル・フォン・ケーベル、下田次郎訳『哲学要領』南江堂 1897年。
- 14 桑木敬翼「ケーベル先生の思ひ出」『思想』1923年8月号 38ページ。
- 15 久保勉訳編『ケーベル博士隨筆集』岩波書店 1957年 95ページ。

- 16 Koeber, Raphael von: *Kleine Schriften: Neue Folge*. Tokio: Iwanami, 1921, S. 7.
- 17 久保前掲書 207 ページ。
- 18 デュ・プレルの経験については、Kaiser, Tomas: *Zwischen Philosophie und Spiritualismus. Annäherungen an Leben und Werk von Carl du Prel*. Saarbrücken: Verlag Dr. Müller, 2008, S. 31f. デュ・プレルとドイツ文学および思想との関係については、近年多くの研究者が言及している。たとえば Sommer, Andreas: *From Astronomy to Transcendental Darwinism: Carl du Prel (1839-1899)* In: *Journal of Scientific Exploration*, Vol. 23 No. 1 pp. 59-68 2009 や Pytlík, Priska: *Okkultismus und Moderne. Ein kulturhistorisches Phänomen und seine Bedeutung für die Literatur um 1900*. Paderborn, München [u. a.]: Schöningh, 2005 および Kirchberger, Nico: *Schau(spiel) des Okkulten: Die Bedeutung von Mesmerismus und Hypnotismus für die bildende Kunst im 19. Jahrhundert*. Berlin: Deutscher Kunstverlag, 2016などの文献がある。また、デュ・プレルの思想と19世紀後半の科学技術文明については、熊谷哲哉「カール・デュ・プレルの心靈研究における科学と発達」京都大学大学院独文研究室『研究報告』第24号 2010年 63~78ページを参照。
- 19 Du Prel: *Oneirokritikon. Der Traum vom Standpunkt des transzendentalen Idealismus*. In: *Deutsche Vierteljahrsschrift*. April-Juni 1869, S. 188-241.
- 20 Kaiser, S. 37. カイザーによれば、デュ・プレルとハルトマンは16年に亘って書簡を交わしたが、ベルリンとミュンヘンという地理的な隔絶、そしてハルトマンの脚の障害のため、一度も直接会ったことはなかったという。デュ・プレルにとってハルトマンは、「教育者で、助言者で、教師」だったという。また、ハルトマンは、書簡においてしばしばデュ・プレルに読むべき最新の哲学文献を紹介していた。1884年初頭の書簡では、ケーベルが発表したばかりの本『エドゥアルト・フォン・ハルトマンの哲学体系』(Das philosophische System Eduard von Hartmann's)に言及し、内容を称賛するとともに、本を送ると申し出ている。Vgl. Eduard von Hartmann an Carl du Prel, Berlin 4. 1. 1884. (未公刊) および Hartmann an du Prel, Berlin 28. 4. 1884. (未公刊)。ケーベルがミュンヘンに移住したのは、1885年のことだが、ハルトマンとの書簡を通じて、デュ・プレルはすでにケーベルについて知っていたと考えられる。
- 21 この書については、熊谷哲哉「カール・デュ・プレルの夢研究—フロイトとの比較を通じて」日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第40巻 47~56 ページ 2007年を参照。
- 22 Kaiser, S. 87.
- 23 Ebd. S. 93.
- 24 リルケはデュ・プレルの『心靈主義』に感銘を受けて、書簡を送っている。Vgl. Pytlík, S. 61.
- 25 Kaiser, S. 267.
- 26 Koeber: *Du Prels monistische Seelenlehre*. In: *Sphinx* Bd. 5 1888, *Kant ein Swedenborgianer?* In: *Sphinx* Bd. 8 1889, *Die neue Mystik*. In: *Sphinx* Bd. 9 1890, *Leo Tolstoi und sein unkirchliches Christentum*. In: *Sphinx* Bd. 9 1890, *Das System des individualistischen Monismus*. In: *Sphinx*

- Bd. 12 1891, *Die Seelenlehre des Okkultismus*. In: *Sphinx* Bd. 13 1892, *Goethes Ansichten von der Unsterblichkeit*. In: *Sphinx*. Bd. 14 1892 この他にも多くの論考を発表し、『スフィンクス』誌だけでも 20 本ほど寄稿していた。
- 27 Koeber: *Kleine Schriften*. Tokio: Iwanami, 1918, S. 304ff.
- 28 Vgl. Schopenhauer, Arthur: *Versuch über das Geistersehn und was damit zusammenhängt. Parerga und Paralipomena I*. Zürich: Diogenes, S. 247-335.
- 29 Koeber: 1918, S. 330.
- 30 Koeber: *Die Lebensfrage*. Leipzig: Wilhelm Friedrich, 1892, S. 95f.
- 31 Du Prel: *Das Rätsel des Menschen*. Leipzig: Reclam, 1892, S. 71.
- 32 Koeber: 1921, S. 7.
- 33 Du Prel: *Wie ich Spiritist geworden bin*. In: *Der Spiritualismus*. Leipzig: Reclam, 1893. なおこの論文については、熊谷哲哉訳「いかにして私は心靈主義者となったか—心靈主義より一」京都大学大学院人間・環境学研究科文明構造論分野『文明構造論』第6巻 131-153 ページ 2010 年がある。
- 34 深澤英隆は、姉崎の思想的背景にある神秘主義的傾向について言及している。「西洋精神の体現者のごとく帝大生に崇敬されていた姉崎の師、ラファエル・ケーベルは、実はしかしアイロニーに満ちたスラブ人のゲイであり、またミュンヘン時代はデュ・プレルなどの心靈主義者に近い陣営にいた。姉崎はこうした方面の知識をケーベルから受け取ったふしがあり、少なくとも 1900 年からのドイツ留学時代には、訪問したエドゥアルト・フォン・ハルトマンからそのスピリチュアリズムへの傾倒を諫められるほどだった。帰国後最初の帝大での講義のテーマは、「神秘主義」であり、そこではエックハルト等の古典的神秘家と同時に、「テオソフィー、オッカルティスマス……サイキカル、レサアチ」などが論じられた。」深澤英隆『啓蒙と靈性 近代宗教言説の生成と変容』岩波書店 2006 年 210 ページ。
- 35 姉崎は、哲学、哲学史、美学、カントやフィヒテの講説、ギリシア語、そして自主ゼミのような形でプラトンやゲーテのファウストなどを講読してもらい、総出席時間の半数以上がケーベルの授業だったと述べている。姉崎正治「ケーベル先生の追憶」岩波書店『思想』1923 年 8 月号 195 ページ。
- 36 姉崎は、ケーベルからの勧めに従って、シェリングやショーベンハウアーを読み、また生来の関心も相まってキリスト教の宗教哲学を研究し始めたと自伝の中で述べている。姉崎「大学在学時の思い出」『新版わが生涯 姉崎正治先生の業績』所収 大空社 1993 年 60 ページ。
- 37 姉崎は、京都の小学校初等科を終えたのち、京都室町御池の英語塾オリエンタルホールで英語の基礎を学んだが、この塾の主催者で仏教学者としても活躍した平井金三は、明治 20 年（1887 年）に神智學協会会長ヘンリー・スティール・オルコットより「神智學協会日本支部委任状」を受け、のちにはヨーロッパ心靈主義の入門書である『心靈の現象』を著すなど、日本における心靈主義・神智學の普及者としてもよく知られた人物であった。1909 年に刊行した『心靈の現象』には、シュレンク=ノツツィング、チエ

- ザーレ・ロンブローゾらとともにミラノで靈媒ユーサピア・パラディーノを使った、1892年の実験に参加したとしてデュ・プレルの名前も（哲学博士チアールス、ド、プレルと表記）登場している。もちろん年代から見て、平井の神智学や心靈主義への傾倒と、姉崎が師事した時期が重ならないことは明らかだが、平井を生涯の師と慕っていた姉崎が、何かしら後の思想的な影響を受けたことは想像できる。平井金三については、吉永進一ほか『平井金三における明治仏教の国際化に関する宗教史・文化史的研究』科研費報告書 2007年9～23ページ。
- 38 姉崎から高山宛の明治35年1月8日付ベルリンからの書簡で、「この寒村木々の間を分け入りて、閑居の哲学者ハルトマンを訪ぶ。彼はニーチェを以て、単に文学上の成功と見做せり。その東亜経綸策を論ずるや、将来日本の敵は、ロシヤにあらずして、アメリカなりと説く。哲学の事は多く語らず。僕のスピリチスムに近かんとする事には、頗る警戒を與へぬ。」と哲学者を訪問したことが報告されている。姉崎正治『文は人なり』博文館 1919年 429ページ。哲学者ハルトマンが経済政策を論じるというのは奇妙に見えるが、在野の文人であったハルトマンは、専門的な哲学論文のほかにも時事問題についての雑誌記事（たとえば週刊総合情報誌 *Die Gegenwart* には、ドイツの政治についての文章を多く寄稿している）なども多く書いていた。また、自身も心靈主義に関与しているはずであるハルトマンが、「警戒を與へ」たのは、ハルトマン自身は、心靈現象の実在を信奉するという立場には懷疑的で、降靈術などにおいては、靈媒の神経力が聴衆に幻覚を生じさせているという幻覚説をとなえていたためであるとも考えられる。Vgl. Sawicki, Dietrich: *Leben mit den Toten: Geisterglauben und die Entstehung des Spiritualismus in Deutschland 1770-1900*. 2., durchgesehene und um ein Nachwort ergänzte Auflage. Paderborn: Ferdinand Schöningh 2016, S. 348.
- 39 姉崎 前掲書、505ページ。
- 40 Morrow, Avery: *Boundary Work in Japanese Religious Studies: Anesaki Masabaru on Religious Freedom and Academic Concealment*. In: *Correspondences* 6 no. 2, 2018, p. 15.
- 41 また、帰国後の1908年には、新聞に英國での心靈研究について紹介している。この記事の中で姉崎は、SPRにおける自動筆記やテレパシーなどの心靈現象の研究を紹介し、フレデリック・W・マイヤース（1843～1901）の著作に言及して、靈魂の存続について解説している。なお、読売新聞に連載されていた「潜める意識の研究」は、姉崎の他、平井金三、福来友吉（念写実験などを行った心理学者）など当時日本でも流行しつつあった心靈研究についてよく知る人物たちが、一般読者に分かりやすく解説する特集記事であった。姉崎「潜める意識の研究」『読売新聞』1908年11月18、19日 朝刊。
- 42 武林無想庵『むさんあん物語3巻』無想庵の会 1963年 469ページ。
- 43 姉崎正治『復活の曙光』有朋館 1903年 117ページ。
- 44 姉崎 前掲書、260ページ。
- 45 姉崎正治『新時代の宗教』94～95ページ。
- 46 深澤 前掲書、102～106ページ。
- 47 逆に姉崎以外のケーベルの教え子たちが、どのような形で、師の哲学を継承したのかと

いう観点にも注目する必要はある。先行研究においても、たとえば藤田正勝の『日本哲学史』では、和辻哲郎における文献学の重視や、阿部次郎における大正教養主義、桑木敬翼の抱いた神秘主義的傾向への反発なども含め、ケーベルからの影響の大きさについて、わずかなページ数ではあるが、言及されている。藤田正勝『日本哲学史』昭和堂 2018年 132～134ページ。

Raphael von Koeber und Carl du Prel

Zum Einfluss des deutschen Spiritismus auf die moderne japanische Philosophie

Tetsuya KUMAGAI

In diesem Aufsatz werde ich die Beziehung zwischen dem deutschen Lehrer Raphael von Koeber (1848-1923), der vom Ende der Meiji-Periode bis zur Taisho-Periode als Philosoph, Deutschlehrer und Musiker in Japan tätig war, und Carl du Prel (1839-1899), mit dem er seit Mitte der 1880er Jahre in München lebte, erörtern. Aufgabe dieses Berichts ist es, die Beziehung zwischen Koeber, du Prel und dem spiritistischen Kreis in München aufzudecken und zu zeigen, wie die populäre Lehre des Spiritismus Deutschlands in Japan eingeführt wurde und wie sie die moderne japanische Philosophie beeinflusste.

Koeber wurde 1848 geboren und studierte Musik in Moskau, bevor er nach Deutschland zog, um in Jena und Heidelberg Biologie und Philosophie zu studieren, wo er unter anderem bei Haeckel, Eucken und Kuno Fischer lernte. Er studierte die Philosophie Schellings, Schopenhauers und Eduard von Hartmanns. 1880 wurde er mit einer Arbeit über die Philosophie von Schopenhauer promoviert. Danach verbrachte er etwas mehr als zehn Jahre in München. Dann kam er 1893 auf Empfehlung von Hartmanns nach Tokio, wo er an der Kaiserlichen Universität Deutsch, Philosophie und Musik lehrte. Zunächst hatte Koeber geplant, nach drei Jahren nach Deutschland zurückzukehren, aber er lebte dort bis zu seinem Tod weiter. Unter seinen Schülern waren führende Figuren der modernen japanischen Geisteswissenschaften wie Natsume Soseki, Nishida Kitaro, Kuki Shuzo, Harano Seiichi usw. Als Koeber 1923 starb, schrieb jeder von ihnen einen Nachruf, in dem sie ihre Dankbarkeit gegenüber Koeber zum Ausdruck brachten. Obwohl Koeber eine sehr wichtige Rolle bei der Einführung der Philosophie in Japan während der Meiji-Zeit spielte, sind seine Forschungsaktivitäten und seine Freundschaft in Deutschland vor seiner Ankunft in Japan weitgehend unerwähnt geblieben, sowohl in Japan als auch in Deutschland.

In Koebers „Kleine Schriften“ wird der Münchner Philosoph Carl du Prel als enger

Freund erwähnt: 1839 im bayerischen Landshut geboren, studierte du Prel Philosophie und promovierte mit seinen Studien über Träume und das Unbewusste. Er und Hartmann waren etwa gleich alt und interessierten sich in ähnlicher Weise für Träume und das Unbewusste, so dass sie noch viele Jahre miteinander korrespondierten. Als freier Autor schrieb du Prel viele Bücher über eine breite Reihe von Themen wie Evolutionstheorie, Kosmologie, biologische Geschichte, das Unbewusste und Spiritismus. Mitte der 1880er Jahre gründete er in München die Psychologische Gesellschaft, die sich mit der Verbreitung und Erforschung des Spiritismus beschäftigte. Sein Freund, der Okkultist Hübbe-Schleiden, gründete auch die Zeitschrift „Sphinx“, zu der er zahlreiche Artikel über okkulte Phänomene schrieb. Diese Artikel wurden später in mehreren Büchern veröffentlicht. Der von du Prel gegründeten Gesellschaft war auch Koeber beigetreten. Als produktiver Schriftsteller und Pionier des philosophischen Spiritismus in Deutschland starb du Prel 1899.

Obwohl sich ihre Forschungsmethoden unterschieden, hatten Koeber und du Prel gemeinsame Interessen, die sich in vielerlei Hinsicht deckten. Du Prel betonte das Experimentieren und die wissenschaftliche Argumentation, während Koeber metaphysische Überlegungen in der philosophischen Literatur bevorzugte. Koeber schätzte die Ideen des Atheismus von du Prel, den Glauben an die Unsterblichkeit der Seele und die Entwicklung der individuellen Seele im Jenseits, und er selbst trug in der Zeitschrift s.o. verschiedene Artikel bei, die Spiritismus und Philosophie miteinander in Beziehung setzten. Die Tatsache, dass Koeber am Übersinnlichen interessiert war und dass seine Philosophie auf dieser Idee beruhte, ist in den japanischen philosophischen Studien bislang nicht betont worden. In dieser Hinsicht kann jedoch ein Vergleich der Arbeiten von du Prel und Koeber das Einflussverhältnis deutlich machen.

Koebers Interesse an Mystik und Spiritismus soll einen großen Einfluss auf Anesaki Masaharu (1873–1949) gehabt haben, der eine der führenden Figuren der frühen Religionsphilosophie in Japan war. Anesaki wurde während seines Studiums an der Kaiserlichen Universität von Koeber nicht nur in deutscher Sprache und Philosophie, sondern auch in Griechisch, Ästhetik und deutscher Literatur unterrichtet. Nach seinem Universitätsabschluss ging Anesaki zum Studium nach Europa. Zu dieser Zeit interessierte sie sich für Spiritualismus, und in London trat er der SPR bei und war auch von einem Vortrag der berühmten Theosophin Annie Besant beeindruckt. Darüber hinaus schrieb er in Berlin an einen Freund, dass er sich mit Hartmann getroffen habe